

# ぶんご HOME

## 「農」で踏み出す人と支える人の取材を通じて

移住定住促進のための手作りフリーペーパー第3弾を読んでください、ありがとうございました！

豊後大野市地域おこし協力隊の移住定住促進業務を担当している日淺紗矢香と申します。

今回、①長谷川地区での別府大学卒業生と地域の人々②農業大学の現役生・卒業生・先生③インキュベーションファームの曾農指導員と9期生の3組を取材させていただきました。

この3組のみなさんを取材して見えてきたのは、豊後大野市の「農」を通じて「挑戦する人」と、それを「受け入れ支える人」の存在です。

豊後大野市は豊かな土壌と水に恵まれており、農業に適した地ですが、そんな地で若者や市外から来た人々を応援し支える地域の人の存在が温かで素敵だと、素直に感動しました。

令和2年 8月  
地域おこし協力隊 日淺紗矢香

私自身も移住者であり、まったくのよそ者が地域に入ることに最初は不安がありました。しかし、実際に暮らし始めるに、近所の方や同じ町の方、市の職員さん達など多くの方が温かく受け入れ支えてくれました。

豊後大野市は平成17年に合併したばかりで、まだ認知度は高いとは言えませんが、移住者や市外から来る人々への受け入れる力がとても高いと感じます。

これからもそんな豊後大野市の魅力をどんどん発信していきたいです。

改めて、フリーペーパー第3弾を最後まで読んでください本当にありがとうございました！そして、取材に協力いただいたみなさまに心より感謝いたします。

## 豊後大野市 地域おこし協力隊

地域おこし協力隊とは、高齢化や人口減少などが課題の地方において、都市部から若者等を受け入れ、3年間のミッションに従事したのち、その地域への定住を図る総務省の制度です。

令和2年8月現在、豊後大野市では6名の地域おこし協力隊が活動しています。それぞれミッションは異なり、地域振興活動、移住定住促進業務、宿泊業務などをしています。

それぞれの活動において地域の皆様には日々大変お世話になっております。今後とも、私たち地域おこし協力隊へのご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。

また、8月いっぱいをもって地域振興活動担当の後藤聰美さんが3年間の業務を終了します。新型コロナウイルスの影響により、活動報告会を開催することはできませんでしたが、豊後大野市ケーブルテレビの番組を通して

じて皆様へ活動報告をしました。3年間駆け抜けた後藤聰美さんの今後ますますのご活躍を祈念しております！

豊後大野市地域おこし協力隊は新メンバーも募集しています。詳しくは市役所HPをご覧ください！



## ぶんご HOME vol.03

2020年8月発行

発行：豊後大野市役所まちづくり推進課 地域おこし協力隊  
発行人：日淺紗矢香

問合先：豊後大野市役所まちづくり推進課

TEL / 0974-22-1001 FAX / 0974-22-3361

第4号は11月に  
発行予定です♪



「農」で、人と未来をつなぐ。

Bungo Home



地域の中に入って学び、  
未来へ繋げたい。

豊後大野市緒方町の長谷川地区では、  
昨年の秋から1軒の空き家に毎週末灯りがともっている。  
噂を聞きつけ伺うと、そこには、  
週末たびに長谷川地区に来て、空き家を改修し、  
地域の行事に積極的に参加して楽しむ  
「農」に対する熱い想いにあふれた若者たちの姿があった。

メンバーは全員で7名。今回は4連休で活動をしに来た  
4名の皆さんにお話を伺った。

01 地域交流×未来へ繋ぐ



1 みんなで改修中の空き家。この地域での居場所づくりをしている。



2 地域の作業で切った草木を整備するようす。

## 地域で、将来を見つめる。



森宗一先生



前畠奈央さん



今村和弘さん



森野晃大さん

別府大学で経営戦略を研究している森宗一先生とそのゼミ卒業生たち。大学の授業やサークル活動等ではなく、彼らはプライベートでこの地区と関わっている。空き家改修の費用も交通費もすべて自己負担。それでも、彼らにとってこの長谷川地区での週末は「非日常で貴重なもの」だという。

「この地区は獣害対策が非常に先駆的なんです。」農業法人の経営支援のスペシャリストとして、数多くの集落へ訪問し指導してきた森先生はそう目を輝かせる。

長谷川地区とのつながりは8年ほど前から。集落営農の研究で訪れたこの地区的農業レベルに感動したという。そんな地で、地域の人から紹介してもらった空き家を改修しながら居場所づくりと農業について学ぶ機会を別府大のゼミ卒業生と共につくっている。

森ゼミ卒業生のメンバーは全員農業への道を志す。しかしその「農」のスタイルは個々人で異なり、獣師もいれば農家の継承、農業経営指導など多面的な視点と夢が集まる。

前畠さんは森先生のゼミをきっかけに、大学院で農村に関する研究をしている。鹿児島の実家は農家だが、大学で学ぶまで農業には関心がなかったという。大学院では農村発展論について学んでおり、「将来も農村に関わる仕事をしていきたい」と笑顔で話す。この長谷川地区での地域の人たちとの交流がその想いを加速させた。

別府大学を卒業し、熊本の実家で柑橘農家をしている今村さんは、今の日本の農業従事者の高齢化と後継者不足に危機感を抱

いており、それを緩和するための経営について真剣に考えている。「自分たちの世代がしっかりと『稼げる』農家となり、雇用を生み出す仕組みづくりをすることが重要だと思っていましたし、それが食糧生産を増やし日本全体を守ることにも繋がってくると考えています。」と力強く話した。また、「農業で欠かせない獣害対策について、この地区でより考えを深めることができました。」と振り返る。

森野さんは大分市出身で、別府大学を卒業後に、豊後大野市の農業大学校へ現在通っている。祖父は米農家だが、両親はサラリーマン。それまで将来なりたい職業として考えていなかつた農業を志すようになったのは、やはり森先生に出会ったからだという。ここで家づくりをしながら、農業経営について語り合う時間や経験について「ここで自分の知らないことやそれぞれの得意なことを沢山話します。多様性が認められ高めあえる関係だと思います。そして何よりも楽しくて、自分の居場所だと感じています。」とほほえむ。

毎週末、豊後大野市の出身者ではない彼らはこの地へ来て、獣害対策や農業経営について真剣に考え方、地域の草刈りや手入れも自主的に実施する。そんな彼らを地域は温かく受け入れる。森先生いわく、「何か地域へ恩返しできないかという想いの強い子ばかりです。」

積極的に地域へ入る若者たちと、若者を受け入れることで元気になる地域の人々。そんな関係性が、ここ豊後大野市の一つの地区にあった。

## 地域で、受け入れる。



児玉容一さん

「家にな、灯りがともるだけでみんな嬉しいんだよ。」森ゼミ卒業生のメンバーみんなが「容さん」と慕う児玉さんはそうほほえむ。

自身が一度、市外へ出て、Uターンした経験を持つ。地域へ外から人が来ることは「新しい風は地域にとって新鮮で重要だ」と大切にし、若者たちを常に気づかせて地域の歴史や昔の暮らし、知恵などを惜しみなく伝える。「容さんのがいるから地域に溶け込める」と森先生が断言するほど、大きな存在であることは間違いない。



三代泰司さん

長谷川地区を元気づけるために奥嶽茶屋という地域のコミュニティスペースをつくった三代さんも、外から地域に来る人々をいつも歓迎しサポートしている。

長谷川地区で昔から行われていた祭りも年々高齢化と人口減少が原因で開催が困難になってきていた。そんな中、森ゼミ卒業生たちが正月の祭りに参加してくれた。「若い人がいるとみんな元気がわいてくる。とてもありがたいよ。」活動に必要な道具も快く提供し、いつも歓迎しサポートしてくれる。

# 地元の産業を 守りたいから。



豊後大野市にある大分県立農業大学校。そこでは、就農するにあたっての技能や知識を学ぶことができる。今回、その農業大学の卒業生、現役生、農業指導員の先生へお話を伺った。

02

教育×未来へ繋ぐ

「大分の野菜畠」と言われるほど多彩な野菜が栽培され、大分が誇る肉用牛「おおいた豊後牛」の飼育も盛んな豊後大野市。そんな「農」に熱いこの市で、熱い想いを持って農業従事者になるべく若者たちが学ぶ学校がある。「大分県立農業大学校」だ。

この農業大学校では農業のスペシャリストとなるべく、魅力ある農業実践教育を行っている。学部は、2年間の履修科目を学ぶ農学部と、農業経営に必要な機械等の操作や資格取得のための研修を受ける研修部に分かれる。

農学部の総合畜産科で肉用牛について学ぶ現役生の首藤翼さんと、同じ科の卒業生である吉良佑太さん、そして大分県庁職員であり、農業大学校の農業指導員をしている加藤一陽さん。今回お話を伺った3人はみな豊後大野市出身。高校卒業と共に進学や就職で市外へ出る友人たちがいる中、彼らが地元で頑張るその想いとは。

農業大学校 卒業生  
吉良佑太さん

大分県庁 農業指導員  
加藤一陽さん

農業大学校 現役生  
首藤翼さん



-みんなの事を教えてください。

**加藤さん(以下加)**: 私はこの農業大学校で農業指導員として着任して2年目になります。担当は水田・露地野菜クラスです。

**吉良さん(以下吉)**: 僕は地元の中・高を卒業して県内の農場で少し牛について学んだ後に、この農業大学に入って卒業しました。今は父親と二人で毎日48頭の和牛を育てています。牛はかわいいですよ。

**首藤さん(以下首)**: 僕は今、農業大学校で肉用牛を学んでいる最中です。一人前になるべく、日々励んでいます。

-農業大学校での勉強はいかがですか？

**吉**: 楽しくもあり、難しいなと感じることもあります。専門分野を自分なりに理解しなければ…って。でも、実際に牛を目の前にしたときに学ぶことは違った方面で得る知識があって、それは本当に大切なことだと思います。例えば、牛がかかる病気についてとか、知つておかないと現場で適切に対応できないと思います。

**吉**: 情報収集だったり、市場格差など視野を広げて見ることの大切さを実感できますね。やっぱり家業の牛としか関わっていなかったら、全体を気にする機会や意識も薄くなっていたと思うんです。大学でそういった「全体を見る」力というか意識を得たと思います。

-お2人ともなぜ肉用牛を学ぼうと思ったのですか？

**吉**: 親が牛飼いをしていて、小さい頃から和牛を見て育ちました。和牛は、とにかく見た目が黒々としていてかっこよくて昔から好きでした。だから、学校で学んで和牛を育てていくのは自分にとって自然な事だったんです。1頭1頭、名前をつけてかわいがっています。大変なこともあるけれど、とてもやりがいがあるし、楽しいですよ。

**首**: 僕も、祖父母が和牛を飼育していたことがあって、小さい頃から牛を見ていきました。なので、自然と自分も和牛の道を進んだんだと思います。手をかけた分かえってくる喜びが魅力ですね。

-加藤先生は農業大学校での指導はいかがですか？  
**吉**: 学生と関わることがまず楽しいですね。そして人の育成の仕方は昔と今とでは違うなということを感じました。農業自体、どんどん従事者が高齢化していて、「いかに次の人に繋げるか」というところが重要なっています。農業大学校では県内外各地から学びに来て、そのまま豊後大野市や大分県内の農業法人へ就職したり、独立する人もいます。2年間という短い期間で、農業や畜産がどんなに魅力ある職業か、その大きさをさらに伝えることが大事だと強く思います。

-後継者不足は深刻な問題ですよね。

**吉**: 自分の住んでいる地区も、昔はもっとたくさん和牛を育てている家があったみたいで…。今はもうかなり減ってきてるんです。どうにか和牛の魅力を発信してたくさんの若者に興味を持てもらいたいと思っています。

**吉**: 地方って仕事が無いと言われるけれど、そういうんじないんですよね。豊かな資源の宝庫で、やりがいのある仕事がたくさんある。特に一次産業は人々が生きるうえで欠かせない大切な仕事だから、これからもっと注目度が上がってくんじゃないかな。

-みなさんが地元で働いたり頑張る理由って何でしょうか？

**吉**: やっぱり地元が好きだからですね。そして、盛りあげたいという気持ちもあります。小さい頃から見てきた美しい水田の風景がずっと潜在的に心の中にあって、それなのにどんどんと、誰もやる人がおらず維持できなくなったり荒れ果てた農地を見ると、これじゃダメだという気持ちになります。大好きな地元で育ったからこそ、この地の農業を維持したい、発展させたいという想いが強くあります。

**吉**: 今住んでいる地区含め、豊後大野市全体でどんどん牛飼いが減っているところに、やっぱり少し使命感がありますね。減っているからこそ、この地で牛を育て続けたいと思うし、もっともっと発信しなければとも思っています。

**吉**: 僕は深くはあまり考えたことはことはないんですけど、地元はやっぱり心地良いなと思います。牛飼いのことで悩んだ時は、吉良さんに相談しています。それがとても心強く感じます。これから農業大学を卒業しておおいた和牛を立派に育てあげたいです。

加藤さん、吉良さん、首藤さんは、実は居住地も同地域。学校外でも地域の中での繋がりがある。農は一人ではできない。だが、支える存在が一人でもいることで前に進むことができる。学び、相談し、教える。そんな関係が豊後大野市の農業大学校の中にあった。そして、そんなエネルギーあふれる関係性が地域の元気に繋がっていくことは間違いない。

「新規就農」という移住・定住を  
全力で支援する。

### インキュベーションファーム



#### 03 | 就農研修×未来へ繋ぐ

### 支える人 「農業して良かった」と言ってくれた時が最高に幸せ。

西日本有数の生産量を誇る豊後大野市のビーマン。この夏秋ビーマンの栽培を学び、新規就農を目指す「豊後大野市インキュベーションファーム」では、県や市と連携して、貿農指導員やJA ビーマン部会が農業で起業を志す人々を手厚く指導する。

令和2年度からインキュベーションファームの営農指導員として研修生をサポートする伊東さん。農業歴は40年で、様々な野菜や花などを栽培してきた。また、時にはUターンで豊後大野市へ戻ってきて農業をしたい人に農業を教えたり機械を探したりと、多くの若者や夢を持って豊後大野市で生きる人々を支援してきた。そんな経験と人望により、数年前からインキュベーションファームの研修生を補佐という立場で指導に関わり、今年度から本格的な指導員として選ばれるに至った。

「農業を教えた生徒さんから『農業をしていて本当に良かった』と笑顔で言われた時が何より嬉しいですね。」収穫したばかりの大きなビーマンを前に、そう目を細める。

インキュベーションファームは、田舎暮らしに興味がある人の地方移住をするきっかけにもなっている。財政的な支援を受けながら地方で就農することができるため、農業経営や田舎暮らしを目指す人には、移住の際の

ハードルが下がる。東京などの都会からインキュベーションファームへ来る人も少なくない。そんな「外」から地方へ来る人を、伊東さんは大歓迎している。「インキュベーションファームを通じてたくさんの方が移住してくださって、荒れた農地がまた輝き出したり、空き家に灯りがともったり、お子様が誕生したりと地域の元気につながっているんです。」

伊東さんは研修生たちへ、地方で暮らすにあたっての心構えについても伝える。人ととの距離が近い分、関わり合いが一方通行にならないよう、相互に思いやることがその地域の一員として溶け込むことにつながる。そしてそれはより良い農業ライフのためにも不可欠だ。

「農業の魅力って、自分が努力した分だけ収穫量が増えたりと、しっかり答えてくれるところだと思っています。地域との関わりも大切にすれば必ず充実した暮らしになると思っています。」

就農指導のみでなく、研修生たちの地域での暮らしと未来の人生をも想い、力強くサポートする営農指導員の伊東さんの存在は、研修生たちの大好きな支えになっている。



後藤亜矢子さん・須啓さん 廣田拓朗さん・祐子さん 岩谷聰さん・美彩さん

### 踏み出す人 夫婦の時間、家族の時間…一番大切にしたいから。

太陽の光がキラキラと輝く中、インキュベーションファームの研修室内では明るい笑い声が響く。インキュベーションファーム 9期生のみなさんが指導員の伊東さんと楽しそうに話しながら、収穫したビーマンの選別作業をしていた。9期生の岩谷さん夫婦、廣田さん夫婦、後藤さん夫婦はみな、福岡県から移住してきた。

「妻と一緒に仕事をしたくて。」そうはにかみながら奥さんを見つめる岩谷聰さんは、豊後大野市へ来る前、日々多忙な時間を過ごしていた。専業主婦だった美彩さんと二人暮らしだったが、お互いがゆっくりと向き合う時間は少なかったという。農業に興味を持ち、あらゆる就農支援施設を調べるうち、災害に強く水も豊かな豊後大野市に目が留まった。インキュベーションファームでの研修の日々は「喧嘩しながらも毎日一緒に頑張っています！」と笑顔で話す。研修終了後も仲睦まじく農作業をする様子が目に浮かぶ。

廣田さん夫婦も家族との時間を確保するために農家になる選択をした。『4歳の子がいるんですけど、子どもと

遊んだり成長をゆっくりと見る時間がなかったんです。』インキュベーションファームの存在が、夫の拓朗さんの実家のある豊後大野市へ移住する決め手となった。「初期投資の少ないビーマンで確実に収入を得る仕組みができるので、少人数体制で深い指導をしてくれます。」と絶賛し指導員の伊東さんと顔を見合わせて笑いあった。

後藤さん夫婦はサラリーマンから農業への転身に「モノの見方が変わってきます。」と自身の変化を感じていた。妻の亜矢子さんの祖父が米農家をしていたこともあり、どこかで農業を意識して生活を送っていた日々。インキュベーションファームの存在を知り、1泊2日の体験に2度も参加し、お子さんの小学校入学のタイミングを見計らって豊後大野市への移住を決意した。

それぞれの夫婦にとって人生の新たな挑戦となったインキュベーションファーム。そこには家族を想う気持ちが原動力としてあった。2年間の研修とサポートを経て、9期生のみなさんは独立したビーマン農家としてのさらなる一步を踏み出す。

具体的な研修内容は?どんな補助がある?  
インキュベーションファームの詳しい内容はお問い合わせください。

豊後大野市役所農業振興課 担い手支援係 電話:0974-22-1001

